

随想



ひろしまの「海と島」の多義性

長嶋 俊介

憧れの尾道は、造船業用の水路が長々と続く海。対岸部と背は高き丘陵地帯。夜明け前から対岸の造船所の灯りが目につく。魚の行商のおばさんが小雨の中、荷造りしていた。人数は減ったという。尾道駅から港まで僅か数歩。新幹線からの遠さと比べ意外であった。横島行きで百島へ。着くと雨の中、多数の出勤者が乗り込んで来た。尾道と逆方向の対岸に常石も造船地帯。通勤島。フェリーでバキュームカーも来て三台での集中作業の日。堀が囲む塩田跡地ではチヌ養殖もしていた。横島に田島の開閉橋は大橋になった。大型架橋が本土側へも伸び、施工中であった。新しい余暇基地に生まれ変わろうとしている。岩礁利用で「く」の字型になる。田島の街並みも一見の価値がある。移民成功者が蔵・屋敷を立て、それが美しい屋並みを形成している。フィリピンでの成功者が明治末期に多か

った。満越は半島状。確認に行くと運河が陸塊を裂き、両湾を繋いでいた。隣りは大貯木場。その本土から百島の雇船で因島大橋下を通り、横島・加島・岩子島を経験した。

かの毒ガスの島、大久野島。夏とて中学校

生のキャンプ活動で賑っていた。五十面近くもあると感じさすほどのテニスコートの長い列、瀬戸内の海と空と緑を映し出す年齢対象別のプール。そこは国民休暇村として最も盛況の季節であった。

毒ガス資料館、貯蔵庫跡、トンネルを抜けて入ると広大な作業所跡。円型の砲台跡地はキャンプファイアー用にも利用。作業所跡のガラスは破れたまま残り、落書きが風月を教え、なお多数残っているウサギ達が当時の飼育目的を彷彿させてもくる。

戦争を、子供達、青年達に無言のうちにも考えさせ、学ばせる施設としてこの島の証言能力、利用価値の高さを覚えた。『地図から消された島』（ドメス出版）を帰りの新幹線で読んだ。島の「隔絶性」は社会悪目的に使うべきではない。

深い憤りが込み上げてくる。玉砕のアッツ島にも毒ガスが持ち込まれ、沖縄へは米軍が報復用に準備し使用寸前であったという。

広島・長崎・マーシャル諸島・ムルロア環礁・スリーマイル島……その象徴的存在「ヒロシマ」で、来年「海と島の博覧会・ひろしま」が七月八日から開かれる。それまでには五百島目に近づけるように、他の仕事もピッチを上げざるを得ない。次は四二八島目になる。